7．3 小根の漁師江戸へ行く

「八幡の語り草」第 1 話（1 頁）

関ケ原の一戦で天下に覇を唱えた徳川家康は慶長十二年四月二十六日に九番目の子息義直を尾張藩主に任じた。義直は始め清須にいたが名古屋城が十五年にほぼ出来上ったのでここに移った。

義直は殊に魚が好きだったので、日々の食膳には知多の浦の横須賀や小根の漁師がとった魚類を料理したものが供えられ、その新鮮な味は殊に彼を喜ばせた。

伊勢の海でとれる魚の味は昔から名高かった。木田の城主であった荒尾小太郎も横須賀の漁師に毎日 5 匹の青ギスを持参するよう命じたという。後に備前岡山の城主となった池田輝政も幼少の頃木田城主となり、やはりこの青ギスを食べた一人であった。

参勤交代の制が定まり、義直も江戸に一年置きに滞在するので、そこは御領主様の威光、「漁師を江戸へ連れて行きうまい魚を獲らせるように」とのお達しが出た。そこで多勢の漁師が東下りをし、品川の大森海岸に土地を頂戴して住みつき、品川の海で漁業に従事して獲物を尾張と同様江戸の尾張屋敷に納めた。これを御菜網役といった。役とは夫役の意味で税の一種である。

漁師は横須賀と寺本の小根とから集められ、大網七張を始め長縄等を持参した。網元坂太兵衛は道中帯刀御免で、彼等の漁船には㊟の焼印が押してあった。江戸の漁船はすべて幕府船手奉行の支配下に置かれたが、㊟船だけは御三家筆頭尾張様の権威を笠に、幕府の支配を一切受けぬ特権を誇った。

小根出身者は享保九年（1724）の記録によると、船 12 隻、漁夫 32 人であったが横須賀は同年 28 隻 125 人であった。扱いには全く差がなかったということである。

尾張の藩主を始め上、中、下屋敷の主な人々は品川の海に活躍する寺本、横須賀の漁師たちの努力で、おいしい魚の刺身や焼物に舌鼓を打っていたのであった。